

## 第六章 「おしどり夫婦」の誕生

### 当選、そして結婚

森山は個人事務所を東京都千代田区麹町の（財）日本写真機光学機器検査協会ビルの二階に置いていた。入口に検査協会の受付があり、その前の階段を上ると二階のフロアの一部が同財團の理事長である森山の事務所である。自民党の議員の中には国会の裏側に並ぶ議員会館とは別に個人事務所を持つものは少なくない。だがそのほとんどはマンションや貸しビルの一室あるいはホテルの部屋などで、森山のようなケースは珍らしい。

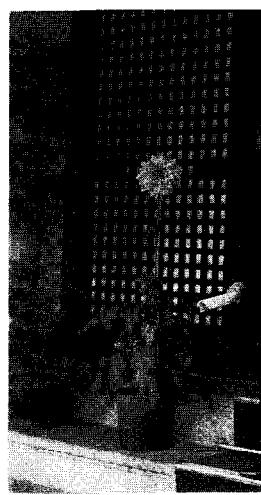
写真業界と森山とは妙な取り合せだが、実は日本の写真工業と森山とは切っても切れない深い関係にある。理由については後に述べるが、この事務所こそ森山の政治活動の事実上の拠点だった。

森山事務所に入つて右手のドアを開けると、そこが森山の執務室になつており、入つてすぐ左手の壁には大きなパネルの写真が一枚かかっている。

最初にそれを見た人は、誰もがにっこり微笑んだものだ。

写真はやさしく微笑む夫人・森山真弓と、柔軟な表情をした森山が、互いに見つめ合っている図柄なのである。かつて評判を呼んだ国鉄のフルムーン・パスのポスターも顔負けといったところだが、国会議員で事務所に夫婦の写真を掲げているのは森山ぐらいのものだろう。家庭人としての森山を彷彿させる。

夫妻がそろつて国會議員というのも珍しいが、森山夫妻は政界でも有名な「おしどり夫婦」だった。森山欽司が夫人・真弓と結婚したのは、昭和二十四年七月二十五日。森山が三度目のチャレンジで、念願の初当選を果したばかりのころだ。



結婚式のあと会場出口で。  
後方の御二人は媒妁をされた桜井和市夫妻（昭和24年7月25日）。

つた。森山に当時の話を聞いた時には、これ以上照れようもないほどに照れた。根は至ってはにかみやだった。

「僕が二十四年の一月に当選した当時はまだ独身でした。そこで桜井和市先生が『森山君、代議士になつて嫁さんもいないので、糸の切れた風みたいだよ。早くもらえよ』といわれたのです。僕は『でも先生、いいのじゃないと困るんだ』といった。先生は『よし、僕がいいのを見つけるから』とおっしゃつてくれてね。こういう話があつたあと、ある日桜井先生が『森山君、いいのが見つかった。ぜひ貰え』といつてきたのです」

「うまでもなく、その『いいの』こそ、真弓夫人だったわけだが、当時、旧姓古川真弓嬢は東大法学部の三年生。北海道硫黄株式会社社長（のち会長）古川俊雄の三人姉妹の長女である。津田塾専門学校を卒業したあと、東大に入学、学内でも才媛の名をとどろかさせていた。

「率直にいって僕も若かつたから、まったく遊んでいなかつたというわけじゃない。でも、お見合いというのは一度もやつたことがなかつた。だから、どうしていいかわからなくてね」

世間からは謹厳居士のように見られていた森山が、見合いを前にオロオロしている図を想像するとかわいいが、森山が選んだ見合いの場所がふるつている。

「ふうしたものかよくわからないもので、結局、東大の二十五番教室のアーケードでということにした。一人だけでね。三四郎池の周りなどを歩きまわつて『君はメシが炊けるか』なんて話をした』二人の出会いと結婚について真弓は地元・栃木県のタウン誌「うつのみや」にこう書いている。

「初対面は、五月の連休の一日。森山は、私よりも、母のことを上品でやさしそうな淑女だといって好きになり、『母親を見れば娘はわかる』などと独り合点して、すぐ結論を出してしまつた。父がお願ひして（友人へ見合いの依頼）始まつたことは言え、その父を含め、私たち一家は政治家というものになじみがなくて不安だつたし、私は、年もずいぶん違うおじさんに怖れをなしたという感じであった。学校を卒業してから考える」とか、『家事をちゃんと習つてから』とか、いろいろ言って時間を稼ごうとしたが、『先へ延ばしたつて同じだよ』と、強引におし切られた』青年代議士とまだ東大在学中の才媛は、卒業を待たずに結婚し、文字通り仲むつまじく三十八年を過ごした。

### 政治家と政治家の妻

二人が結婚した翌年、昭和二十五年四月、真弓は女性に門戸が開かれた初の国家公務員上級職試験に上位の成績で、バス、労働省に入省した。

世間には森山自身を労働省出身と誤解しているものも多い。また森山が労働問題の専門家だから真弓が労働省を選んだとも思われるがちだが、真弓の労働省入省は本人自身の選択だつたと真弓はいう。

「私の意志で労働省を選んだのです。その頃、労働省はてきたばかりでしたし、他の役所も、行けば面接ぐらいはしてくれたかもしませんけど、採用されたとしても、どういうところで使っても

らえるかわからない。その点、労働省には婦人少年局というのがあるから、使いみちも考えてくれるのじゃないかと思った」

互いを伸ばし合った例は少ないだろう。

とくに日本の場合は、よほど夫の理解がないと夫人が仕事を全うすることは難しい。

森山は労働省の局長から参議院議員へと歩んだ真弓を終始、いつくしむように包んできた。それには大きな抱擁力と相当の自己犠牲が必要だ。二人の職業人が同居することは可能だが、家庭を築き、愛をはぐくむことはむづかしい。

森山は漱石描くところの「坊ちゃん」風の性格から亭主闐白のように見えるが、実はそうではない。職業を持つ真弓を暖かく見守り、敬愛していた。労働省の局長を退官する頃、真弓が大使の下馬評に上ったことがある。大使になれば夫君は国會議員なのだから当然、真弓の単身赴任ということになる。森山が反対するだろうと周囲の誰もが思つたが、森山はいとも簡単に「僕はかまわないよ。女房は自分がやりたいこと、役に立つと思ったことをやれば良いさ」といったものである。

政治家の妻というほど難しい立場はない。真弓はその難しい立場にあってなお自らも官僚、政治家を立派に勤めてきた。真弓も相当偉い婦人だが、夫人にそれを両立させた夫君も立派だといわねばならない。互いに敬愛し、刺激し合つて二人は政治家として、人間として成長してきた。

自身の記者が夜廻りにきて帰ると、真弓が小さな紙包みを渡した。記者が帰つて開けてみると

シャケの切身が二切れ入つていた。暖かい人だとその記者はしみじみ思つたといふ。このエピソードは真弓の庶民性、飾り気の無さ、暖かさ、気配り、夫君との間柄などをひっくるめて真弓の人柄を物語つている。

どれほど忙がしくとも、東京にいるかぎりは家で家族とともに夕食をとるのが森山家の方針だった。また、夫妻は結婚五年、十年、二十年といった区切りには、友人、知人に「結婚〇周年」を記念して、報告を兼ねた会合をするのが慣わしだった。もつとも、

「あれは銀婚式までやめました。もう年ですから、もらつたほうだって楽しくもなんともないでしょくからね」

と真弓はいう。

森山の外務省時代の同期生、平原毅にいわせると、

「森山ってのは愛妻家でね。真弓さんと結婚したのはたいへんなプラスだったんじゃないの。あいつの人当たりの悪さや怖がられたりするところを、真弓さんの優しさがカバーしていたよ」

ということになる。一人の仲は淡々として暖かい。その真弓に夫・森山欽司についてきいてみた。

夫・森山欽司を語る

「おしどり夫婦」の誕生

——はじめて森山と会ったときの印象は？

ウフフッ。どうだったんでしょうね。なにしろもう三十五年以上も前のことですから、よく覚え

てないですよ。

——東大在学中の学生結婚というのは当時は珍しかったでしょうね。

別になんの抵抗もありませんでした。その頃は学生結婚なんていう言葉もありませんでしたから。あまり学生のうちに結婚した人はいませんでしたが、私自身は早すぎるという感じもありませんでしたね。

——政治家の妻として、夫君の二度の落選をどう感じましたか？

とても残念でした。時に利あらずっていうのかしら。落選の時はいろいろな悪条件が重なるものなんですね。いつだって一生懸命やるんですけど、選挙での当落は自分の努力以外の条件に恵まれないとだめなんですね。落選を聞いた時はやはりショックでしたけど、本人があまりヘコタしないで頑張ろうという感じだったのです。すぐ次の選挙での当選をめざして走りまわるというタイプでしたから。私も落選したあとは特にやれることはなんでもやろうと思つて頑張りました。

普通の代議士の奥さんに比べれば手伝つたうちに入りませんけど。

——公務員の選挙活動が禁止されていて夫君の応援ができない時はどうしましたか。

国家公務員法がありますから表立つた応援はできません。たとえば演説をするとか、握手をして歩くとかはだめなんです。当落ストレスの時、奥さんが出てきて演説会場で土下座したり、涙とともに訴えると効果があるなんていわれますが、私はそういうことはできなかつた。冠婚葬祭に森山の代理として出席するとか、事務所の中にいてお茶を汲むとかをやりました。でも私が選挙事務所

にウロウロしますと、支持者の人から「こんな所でお茶を汲んだりしてないであつこち歩いてください」といわれる。その方たちになぜ私が運動をできないかを説明するのがむずかしかつた。それがとてもつらかったんですね。でも森山は「役所を辞めろ」なんて一度もいいませんでしたね。

——夫は代議士、妻はエリート官僚から参議院議員へ。家庭の運営は？

普通の家庭と変わらないと思います。普通のサラリーマンの方でも朝早く家を出て夜遅くなる人も少なくないでしょ。代議士も忙しいといったて家庭の側から見れば、朝早く出て行って夜遅くなるだけですから。私の方は、家庭にずっといる専業主婦の方に比べればたしかに違いますが、役所は比較的時間がきちんとといいますし、とくに若いうちは早く帰れますからね。朝食は家族全員で食べましたし、夜も運がよければいつしょです。外から見ると非常に特異なケースに思われるかもしれません、たまたまそれぞの仕事自体が珍しいだけです。自分たちとしてはそれほど変わつていたとは思いませんね。

——家中にいる時と外での森山については？

家庭の中でも基本的には外でのイメージと同様まじめ人間でしたね。でも家にいる時はごく普通の人じやないですか。家の中でお行儀よくしているのは好きじゃない方で、パジャマ姿のままウロついていましたよ。テレビが大好きでね。とくに「遠山の金さん」とか「錢形平次」とかの捕物ドラマが。あとは自然や動物をテーマにしたドキュメンタリーなんかも好きでしたね。あんまりむずかしいのや深刻なのは好きじゃなかったみたい。私がテレビのニュース解説を見ようと思つてテレ

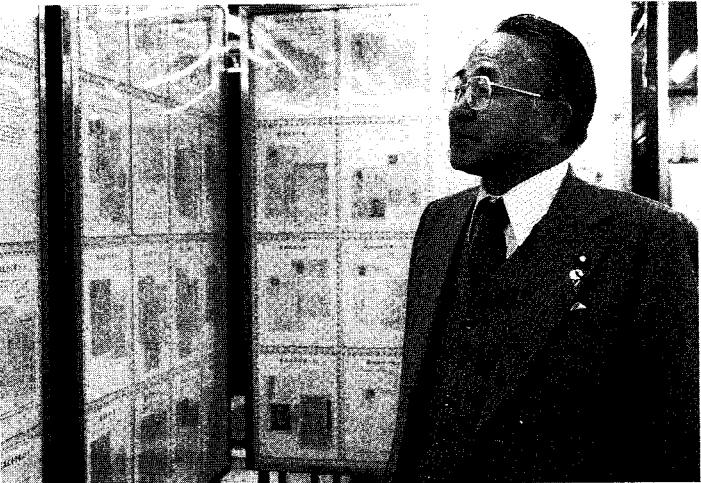
ビをつけると「やめときなさい」っていうんです。政治討論会や国会討論会なんかも嫌いですね。「誰が何というかわかつて」といってほとんど見ませんでしたよ。

——カメラのほかに趣味は?

見かけによらずものすごく趣味が多い人なんです。家にいる時は自分の部屋に閉じこもって趣味に打ち込んでいることが多い。カメラはもちろんですが次に凝っていたのが切手収集。これがすごいんです。郵政政務次官をやったことで郵政省と御縁がてきて、記念切手が出るといだいていた時期がありました。それをずっと積み上げたままにしておいたんですが、ある時一念発起してその整理をはじめたんです。外国からの郵便物の珍しい切手をはがすことからスタートして、だんだん凝りはじめ、次に昭和になってから切手を集めるようになります。切手を集めるとつておもしろいのね。あの小さな穴がどんな風にあいてるとか、どここの線が消えてるとかいうことが問題らしくて、そういうのを一生懸命、ルーペで捜してるんですよ。

私が聞いている話の中で一番おもしろいのは戦争中、乃木大将の二銭切手というのと、同じような色で東郷元帥の七銭切手があつたんです。乃木大将のは紅色で東郷元帥のは朱色ですね。ところがこの切手を作っていたのは戦争中。灯火管制下で印刷していたために、乃木大将の切手を朱色で刷ってしまったのがあるんですって。暗かっただからでしょう。そのうちの一枚を持っていて、これが自慢だったんですね。興味のない人にとっては馬鹿馬鹿しいようなことを一生懸命やってましたね。その道でもかなり有名になっちゃって、日本郵趣協会が毎年開く「日本切手展」の審査員をやって

「おしどり夫婦」の誕生



全日本切手展において、郵政大臣賞受賞。

出品の「国政選挙官製はがき」に見入る森山(昭和59年)。

いたんですね。

最近は選挙葉書も集め出していました。切手収集家はよく葉書も集めるようになるそうですね。森山は選挙用の、それも官製葉書を明治二十三年の第一回の選挙のものからずっと集めていました。いいものを集めるためにものすごい量の古葉書を買う。良いものが集まるとどうしても「日本切手展」に出品したくなる。ところが審査員として出品すると参考出品になってしまって賞の対象にならない。そこで五十九年にはわざわざ審査員を辞任せ選挙用葉書のコレクションを出品し、とうとう郵政大臣賞をとつて大喜びでした。とにかく夢中になるタチでしたね。

動物で好きなのは犬と猫。特に犬好きでし。ずっと飼っていますが、家を建て替えた時など、私がしばらく飼うのをやめようと考

仲の良い夫婦だった。夫妻をよく知る人たちから見ると、真弓の前の森山はまさに「ヤンチャ坊主」だったという。真弓は生前の森山に対し、特に注文をつけたり、要求をするようなことはなかったが、ただひとつ、「もっと健康に注意してほしい」とだけはいい続けていた。まさかその危惧がこんなに早く現実のものになってしまふとは……。

あつたのに、よく国家、国民のために清潔な政治を誠実にやるという信念を変えず、最後まで貫ぬいてこられたと思って感心しますね。その間には困ったことも多かつたに違いないのに。私だったらとてもできません。いい意味で頑固な人でしたね。

初当選の時からほとんど変わりませんでした。政治情勢や社会情勢の変化、自分の立場の変化も

若い時は精神的にも落ちつきが足りないし、経験も不充分でした。最近はもう慣れていましたから、相手が何を考えているか、何かいった時、それはどういう気持ちでいっているのかみんなわかりましたね。夫婦喧嘩？ ほとんどしませんでした。私が馬鹿なこといつたりしたりすると怒られましたけど。意外に見えるかもしれませんのが、家庭をとても大切にした人ですね。

——政治家・森山欽司はどうのような人物でしたか？



犬がないと暮らせない愛犬家森山。  
帰宅の挨拶もまた愛犬に。

えていると、森山は犬がないと暮していけないらしい。必ず飼うんです。いろいろ飼いましたが、いまはボメラニアンが全部で四匹います。とにかく好きでしたね。外から電話をかけてきても、まず「犬はどうだ？」でしたし、帰つてくれれば最初に犬にご挨拶ですよ。あとゴルフもやりましたが、いくらやつても上達しないんで、晩年はちょっと嫌気がさしていたみたい。でも健康のためといって努めてやっていましたが……。

——三十八年の結婚生活を振り返ってご感想は？

## 森山欽司先生の想い出

衆議院議員 水野 清

私と森山先生とは切手収集の趣味を通じて十五年来親しくさせていただいておりました。国会の中で議員も職員も一緒になって切手収集の趣味の会をやろうということで昭和四十六年に国会ファイラーテリスト議員クラブが発足し、その会合を通じてのお付き合いが始まりました。実はこの会が出来る時切手収集などという子供じみたものなので、こんな事をやっているのは私だけだろうと思っておりましたところ、森山欽司先生が発起人の会に出席され、話を伺つてみると私などより数段上のコレクションを持っておられ、たいへん造詣深いことがわかりびっくりしました。国会議員としても大先輩でありますので、先生を会長として国会ファイラーテリスト議員クラブを結成致しました。

ちょうどその頃、奈良の高松塚古墳の発掘が行われて、あざやかな壁画が古墳から発見され国民に大きなインプレッションを与えたました。我々は、この高松塚の切手を出そうといろいろと苦労しましたが、郵政省がなかなか了解してくれません。森山先生がそこで非



高松塚西壁女子像(上左), 同じく東壁男子像(上右).  
同じく東壁の青龍(下).

常に良い案を出されました。これは今的小渕官房長官の提案を引き取つてではありますが、高松塚古墳保護のため、付加金つき切手を出そではないかという案でした。昭和四十八年三月ハガキ用切手二〇円、封書用切手五〇円にプラス五円をつけて三種発行しプラス分を古墳の保護の為に使うという目的で発行する事になった訳です。ところが付加金つき切手は、その都度法律を作らなくてはなりません。議員立法で発行する事で郵政省との間で

ようやく了解がつき

森山先生は会長として議員提案の筆頭に名前を出していただいたことを私は鮮かに覚えてます。だんだんと親しくお付き合いをさせていただくうちにわかつたことは、森山先生は日本の切手の、それも「エラー」にたい

へん興味を持つておられるということでした。私もときどき珍品を見せて頂きました事を懐しく思います。また昭和五十六年「東京国際切手展」が開催されたが、その時森山先生は大変熱心に大会成功に努力されました。その「フィラ・トーキョウ」は郵政半分、民間半分の主催で、外国では郵趣家やボランティアの応援がありますが、日本ではありませんこの様な習慣が確立していないので、資金集めに苦労しました。先生もカメラを景品にして下さったり、何度も会場にお通り下さり各種の会合に出席されていたのが印象的でした。また「フィラ・トーキョウ」の記念切手を発行しましたが、これは明治四年、日本で最初に発行の龍の手彫切手を図案にして記念切手にしたものでした。四版の切手四種類を出そうという案に対し、郵政省からクレームがつき、大蔵省の印刷局が忙しくて受けくれないという消極論が出ましたか、とうとう森山先生の押しの一手で実現できました」とも書き留めておきたい事です。

森山先生は切手の世界でもたいへん熱心でありましたが、労働問題にも熱心で亡くなられるまで自民党の労働問題調査会の会長をしておられましたのはご承知の通りです。ここでやっておられた事は今日の行革の走りです。森山先生は、各省庁や公団、公社の労務対策等に詳しく、一家言持つておられました。ある時、私が二、三の公団、公社の人達から頼まれて、そこで反森山発言をしなければいけなくなりました。まあ役人の片棒を担いだ訳であります。その時に森山先生に発言を求めますと森山先生は私がびっくりする

ほど寛容で、「水野君、どうぞやりたまえ」という訳で、好き勝手なことを言わせていただきました。「ああ、森山先生は、この様な面もあるのか」と私は先生のスケールの大きさにうれしい驚きを持ったことも忘れられません。

話は切手にもどりますが、昭和五十九年「国政選挙官制ハガキ覚え書」という論文を雑誌「フィラテリスト」に載せられ、また選挙ハガキのコレクションをこの年の「全日本切手展84」に出品され、郵政大臣賞を受けられました。このコレクションもいつ、どこで集められたか、前年の五十八年は衆議院の解散、総選挙の年であつたので驚いた次第です。昭和初年からの選挙用ハガキの歴史や、しかも現実に使われた選挙用のハガキを、どこで探してこられたか発掘しておいてになりました。更に五十九年の「フィラテリスト」十二月号でも「前島密一円切手最新チェックリスト」という題で論文を載せられました。實物はその秋のジャベックに出品されました。

この頃の森山先生の収集・研究は最高だったのではないでしょうか。

生前、奥様の森山真弓先生と日々他の会合でお会いする時「欽司先生はお元気ですか」「元気でございます」と奥様の返事が返ってきます。「切手の方はいかがですか」とお尋ねしますと、「さあ、私は切手の事はわからないのですが、自分の部屋へ閉じ籠つて切手を広げている時はたいへん機嫌が良いので、私どもなるべく切手をやっていてもらうのがいいのですよ」というご挨拶をいただきました。もう森山先生がお亡くなりになつて、

## 第七章 三木武夫との出会い

### 政界の七不思議

森山は自由民主党内で弱小派閥、保守傍流といわれた三木派に属し続けた。その三木派は三木の首相退陣のあと河本敏夫に引き継がれ今日に至っている。亡くなるまで森山は河本派の代表世話人を務めていた。

森山の思想、信条からみて、森山が三木派に終始籍を置いたというのは、政界の七不思議の一つである。

政治を少しでも知る人なら、三木武夫元首相と森山の政治姿勢、ものの考え方があまりにも違いますことに気づくだろう。一例をあげよう。

五十一年のスト権ストの時、当時の三木首相は三公社職員に条件付きでスト権を与える方向に傾いた。その方がかえって無茶なストはしないだろうと三木は思った。理想家肌の三木は信を相手の

かれこれ一年近く経ちますが、先生が切手をながめてニコニコしておられるあの笑顔を想い出すのは、私だけではないでしょう。ご家族の皆さんも切手を広げている歓喜先生を想い出されて感ひとしおであろうと思ひます。